城山山麓の墓所（六）

――先人の跡をしのぶ――

山本　保
（会員・佐伯市池船）

一　養賢寺

佐伯市城下東町・養賢寺山門入口には、次のような標識が立てられている。

龍鼎山養賢寺専門道場

この寺は、慶長十年（一六〇五）初代佐伯藩主毛利高政が、鶴屋城の創築及び城下町づくりと時を同じうして、毛利家の香華院（菩提寺）として創建したものである。

開山第一祖は、京都妙心寺から大観慈光禅師を招聘した、所謂臨済宗妙心寺派に属する。

虚空に高々と、銅瓦葺きの大屋根がそびえる本堂、その須弥壇には、本尊釈迦牟尼仏が拝され、その隣りには、藩祖高政像を始め歴代藩主の位牌が並び、大名の香華院として森厳さを示している。

本堂に続く閑静な大書院、大屋敷がそそり立つ古風な庫裡、寄棟造りの位牌堂、江湖専門道場としての禅堂そして白亜塗り込みの経堂など、伽藍がうち並び、四百年近い歴史のたたずまいを深々と示している。

本堂の裏手、一段高いところには、藩祖高政の霊廟をはじめ、歴代藩主の墓塔が立ち並ぶ毛利家の墓地がある。

佐伯市教育委員会

佐伯市にとって、養賢寺（第二十四代片岡省念住職）のある通称〝山際通り〟は、旧藩時代の城下町の面影を色濃く残している地域であり、歴史をふまえた「新しい町づくり」の一つの目玉となっている。

この寺も、文政八年（一八二五）には本堂、庫裏（寺の台所）ともに火災で全焼、そして建立後、昭和二年に

再び出火し、本堂を焼失してしまった。このような経過をたどりながら、再建されて現在に至っている。

二　毛利家墓所

養賢寺裏手の一段高いところにある毛利家墓所前に、つぎのような立札が目につく。

史跡　毛利家墓所

佐伯藩主毛利氏は、慶長六年（一六〇一）初代高政が日田から転封になり、以来明治四年まで、十二代二百六十九年にわたって、佐伯二万石の藩政に当たった。

毛利氏の歴代系図（＝養子）

①高政―②高成―③高尚―④高重＝⑤高久＝⑥高慶―
⑦高丘―⑧高標―⑨高誠―⑩高翰―⑪高泰―⑫高謙―
先代＝高範―当主高棟

ここには、藩祖高政の霊廟（東北隅の建物）をはじめ歴代藩主・奥方・お子様のお墓が並んでいる。

墓塔の様式は五輪の塔で、高い台座の上に整然とならび、その重厚さ、均整美は壮観である。

佐伯市教育委員会

なお、入口のとびらにも「霊廟を尊び、史蹟を保存するため、この墓地で、落書・損壊・遊戯・狩猟すること等をかたく禁じます。毛利家管理者」の注意板も掲示されている。

薬医門を通って、墓地に入ると、大きな五輪の塔が見事な造型で、三十五基林立している。当時二万石の小大名としては、その規模が雄大であって、佐伯市が誇りとする有形文化財（石造建造物）の一つである。

五輪とは、宇宙はすべて五大からなっているとされ、上から空輪（宝珠）、風輪（半円）、火輪（三角）、水輪（円）、地輪（方）の五大の万象から構成されたものであり、地輪には、藩主は「捐館　寛龍院殿前勢州刺吏仁嶽玄機大居士神儀」（八代高標）の二十字からなるおくりな、夫人は「掩粧　清照院殿心月慈鏡大姉淑霊」（高標夫人）の十四字からなる法名、没年月日、さらに藩主の場合は「毛利伊勢守」という文字が、裏面に彫りこまれている。

墓石は、いずれも花崗岩で基壇の上に蓮華の台座、そして地・水・火・風・空の五輪が高々と並び、四尺を越す高さで、威風堂堂たるものである。

藩祖高政（養賢寺殿）と高政母堂（妙西尼公）の墓塔は、向かい合った、方形造と切妻造の二つの廟（御霊屋）の中に安置されている。

数列に並ぶ三十数基の五輪塔には、ある種の威圧すら感じさせられ、佐伯地方の領主として君臨していた時代を想起することができ、県下第一の五輪の塔群であるといっても過言ではない。政治的にも、社会的にも、そして経済的にも安定していた佐伯藩であった。

毛利家個人の墓地ではあるが、佐伯市の重要な文化財の一つとして、その保存管理に充分配慮すべきである。

三　東　禅　寺（東　京）

東禅寺は、佐伯藩主毛利家の江戸における菩提寺で、東京都・品川駅の向い側の小山に所在し、昔から有名な禅寺である。

毛利家墓地は二ケ所に分かれており、周囲は石柵でかこまれ、門扉には、定紋（矢筈の紋）が彫りこまれているが、石塔は五輪様式ではない。藩士関十左衛門長識一族の墓もある。

養賢寺と同じように「寛龍院殿仁嶽玄機大居士神儀」（八代高標）の十三字からなる法名、「清照院殿心月慈鏡大姉淑霊」（高標夫人）の十二字からなる法号、没年月日、そして藩主は「毛利伊勢守高標」の文字などが、裏側に刻まれている。

以上、藩主・夫人・子女のお墓が、三十五基整然と並んでいる。

なお、外に稲葉家、日向飫肥藩、伊達家、伊東祐重一族等の墓地も、同寺内にある。

四　養賢寺と東禅寺

第八代藩主毛利高標は、宝暦五年（一七五五）十一月江戸に生まれ、少年時代から学問好きで、学者を招いて経史などを学び、安永二年（一七七三）六月、十八歳の時、初めて佐伯入りをし、同四年正月伊豫大洲藩主加藤泰武の妹照子を迎えて夫人とした。華燭の典は、もちろん、江戸・上屋敷（中屋敷・下屋敷）で盛大に挙行された。佐伯文庫・藩校四教堂を創設された名君である。

彼は、享和元年（一八〇一）八月四十七歳で江戸に没して、江戸・高輪の泉岳寺（忠臣蔵で有名な寺院）近くの東禅寺に葬られた。

第九代藩主毛利高誠は、父高標、母田中姓（側室）であって、安永五年（一七七六）二月佐伯で生まれた。そして、彼は文政十二年（一八二九）七月、五十四歳江戸で死亡し、東禅寺にほうむられた。

第十一代藩主毛利高泰は江戸生まれ、家督を第十二代毛利高謙に譲り、隠居して、明治二年九月五十五歳佐伯で死去し、養賢寺にまつられた。

このように、江戸で生まれて江戸で死亡したり、江戸で誕生そして佐伯で死去、佐伯生まれ江戸逝去等々、殿様の出生、死没地は各人各様、さまざまである。藩主にとっては、江戸・佐伯は生まれ故郷であると同時に、墳墓の土地であった。これは参勤交代の制度によって、一年は江戸、つぎの年は佐伯と、住所を変えながら暮らすという、不便な二重生活の結果であり、そのため、二つの菩提寺――江戸・東禅寺、佐伯・養賢寺――で同時に法要を営むという生活環境であった。

第九代高誠時代の御定書によると、

一、毎月東禅寺

御霊前へ御代参の儀、去る戊年御改め仰付られ、一ケ月十一度もの処、このたび御省略により、御下屋敷足軽小人ども御霊前番勤め減じ、ただし、左の四日は相勤めるように申付ける。

二日　（父高標御祥月日）　‖　寛龍院殿
十六日　（初代高政御祥月日）　‖　養賢寺殿
廿日　（高標夫人御祥月日）　‖　清照院殿
廿二日　（母‖高標側室御祥月日）‖　信受院殿

右の外、御廟所番は不必要である。

亥七月

関谷隼人（家老職）

江戸・御下屋敷

黒田善兵衛殿

以上の通りであるが、佐伯・養賢寺でも、同じように御用人、御取次が、殿様の名代として参詣し、亡き殿様の霊をなぐさめていた。